

保護者はどのように保育施設を選択しているのか

What makes parents select a child care facility?

関 容子

Yoko Seki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード : 保育施設, 保育施設選択, 保護者

Key words : Childcare facilities, Childcare facilities selection, Parents & Guardians

1. 研究目的

(1) 子育てを巡る問題意識

社会に出て働く女性の増加に伴い、保育所に入所できない待機児童が社会問題になっている。保護者が子どもを保育施設に入れるために行う行動を指す「保活」という言葉が使われるようになった。特に、都市部において0~2歳児の低年齢児からの入所希望が増えており、保護者は、妊娠中や育児休暇中といった少しでも早い時期からの「保活」が必要になっている。なぜ保護者は、低年齢の早い時期から入所させたいと考えるのか。広田(1999)は、「自立していく女性が増えつつある中で、子供の世話やしつけが女性の「個人」としての自己実現と対立する部分がある。」¹⁾と指摘している。広田によれば、親であると同時に、親役割以外の自分自身のライフワークも大切にしたいという人が増えており、それは、子育ての責任を抱えながら、自身の仕事を全うし、その他の個人活動にも関わる状況に置かれることでもある、と論じている。そして、そのようななかでも、「子どもをよりよく育てたい」という子どもに対する熱意や期待は高度成長期以前よりも強まり、『完璧な母親』を演じようとする時代になったからこそ、演じきれない自分や『完璧な子供』になってくれないわが子に関して不安が生まれてきているのである。²⁾と述べている。1970年代以降、親はさまざまなことを教えようとしつけや教育に熱心になっており、「自分で教えられないものや自分よりももっとうまく教えられるものに関しては、お金を惜しまず外部の教育機関を子どもに買って与えている。現代の親たちは、しつけや教育の担当者でもあり、手配師でもあり、最終的な責任者でもある。」³⁾と語り、親にできない部分を、外部の

専門家に依頼する時代になっていることを伝え、親の考えと選択がより教育的なものにならざるをなくなってきていると指摘している。そして、親が子どものしつけや教育に関する、全面的な責任をもつ時代になり、子どもをよりよく育てるための時間やお金をかけることが可能になったことは、親の楽しみでもある反面、子どものしつけや人間形成の責任を一身に引き受けるつらい時代でもあると語っている。

2015年「子ども・子育て支援新制度」がスタートし、保育施設の形態や事業内容が多様化し、保護者の施設選択の幅は広がった。保育施設により、そこで営まれる子どもたちの一日の生活はさまざまであり、保育所や幼稚園という施設形態のくくりが同じであっても、保育環境や保育内容など、それぞれの施設で営まれる子どもたちの生活は様々ではない。施設が置かれた環境や設備、特色ある保育内容や基本保育料金以外にかかる上乗せ徴収等、施設による違いは大きくなり、施設選択を委ねられる保護者の判断はこれまで以上に難しいものになっている。親になって間もない保護者が、子どもといつまで家庭で過ごすか、いつからどのような保育施設に入れるのか、という責任のある大きな判断をくださなければならない。一日の生活時間の大半を過ごすことになる施設での経験は、今後の子どもの育ちを方向付けていくことになる。たくさんの施設のなかから、保護者はどのように子どもの生活の場を選んでいくのか。そのとき、保護者の子育てに関する考えはどのように関わっているのか、保育施設選択は、保護者が子どもへの願いを意識する、家族にとっての大きな節目の時である。

(2) 研究の目的

保護者は子育て観を、いつからどのように抱くようになるのか。保護者の子育てに対する思いは何によって影響されるのか。保育施設選択に関する研究は、「北九州市における保護者の保育ニーズに関する調査：保育機関の選択基準、期待する保育内容及び保育者像」(木山ほか 2003)、「幼稚園・保育所を利用する保護者の幼保一体化施設に対する意識に関する研究」(七木田ほか 2006)、「都市部における父母の保育選択-中産階級の分化に着目して」(石黒 2011)、「保護者の保育ニーズに関する研究-選択される幼児教育・保育-」(住田ほか 2012)、「どのような家族が保育所/幼稚園を利用するのか」(堤 2014)、「保育選択における格差の所在-親の世帯年収、就労形態に着目して-」(小林 2015)、「望ましい保育施設像」と保育制度選択-保護者の利便性と子どもの保育環境の視点から-」(丹治 2015) など、おもに 2000 年代にはじまり、2010 年代頃から検証がはじまっている。量的研究結果から、選択要因や関係因子が明らかにされ、全体的な傾向を見ることができる。しかし、当事者である保護者一人ひとりを見るとき、どのように保育施設を選択しているのか、そこに子育てに関する考えがどのように反映しているのか、という子どもへの願いを読み取ることはできない。どのような子どもに育ててほしいのか、そのために幼児期はどのような施設で、どんな経験をしてほしいのか、という個別の願いが施設選択につながるのではないかと考える。日比野(2013)は、母親自身が受けた子育てのイメージをプラスもマイナスも印象深い出来事として記憶して、両親の子育てをモデルにしながら歩もうとすることを報告している。そして、「母親にとって、子育て期において子どもの存在や子どもの成長が、親としての意識を高めるものであった。」⁴⁾と語り、さらに「個々の母親の成育史が、ライフコース選択や子育て意識に関与する可能性を示唆した。」⁵⁾と報告している。だとすれば、保育施設選択時における保護者の判断も、それぞれの親が受けた子育てのイメージが影響すると考えられる。田邊恭子ほか(2009)は、「母親の持つ自己像・自己モデルが被養育経験の影響を受けて形成され、それが自分の子どもへの関わりに大きく寄与している。」⁶⁾ことを明らかにしている。筆者は、この保護者自身が自己の経験を意識し振り返ることが、「子育て観」を形成する上で大きな要因となるのではないかと

考えた。保護者の被養育経験と現在保護者が抱く子育て観との関連、自身のライフコースの考え方に視点をあて、保育施設選択にどのように関連するのかを検討することを目的とする。

2. 研究の方法

(1) インタビュー対象者

保護者のうち、特に乳幼児期の子育てにおける役割が大きいと思われる母親を対象に、半構造化インタビューを行った。対象である 6 名の研究協力者は、知人やその友人を通して、研究目的を理解し、自身の育ちについて語ってもらえる関東地区在住の保護者から選定した。6 名のうち 4 名は子どもが保育施設(保育所・幼稚園・認定こども園)に入所しており、1 名は育児休業中、1 名は専業主婦である。母親の年齢は 32 歳から 44 歳、子どもの年齢は 0 歳から 5 歳である。

(2) 研究倫理

この研究では、インタビュー内容を IC レコーダーで録音し、内容を逐語で記録し分析すること。インタビューを通して得られた情報に関しては、研究目的以外には使用しないこと。論文では個人が特定できないよう配慮し、研究に協力することで不利益を被ることのないよう最大限の配慮をすることを説明し、研究参加に同意いただいた。

(3) インタビューの時期・場所・所要時間

2017 年 9 月 8 日から 9 月 25 日にかけて実施した。インタビュー場所は、協力者の希望に添って決定した。インタビュー時間は、平均 90.3 分であった。インタビュー内容は、協力者の承諾を得て IC レコーダーに録音した。

(4) インタビュー項目

筆者が用意した質問項目にそって質問する、半構造化インタビューを行った。主なインタビュー項目は次のとおりである。

- ①母親の子ども時代を振り返って
(どこで育ったか、どんな遊びが好きだったか、など)
- ②母親の育ちの環境
(親はどんな人だったか、祖父母に面倒を見てもらうことがあったか、など)
- ③現在の母親の状況
(現在の生活スタイルは以前から望んでいたものか、どんな母親でいたいのか、など)
- ④現在の子育て環境
(経済的な余裕があるか、将来どんな人にな

ってほしいか、自身の幼児期の経験が子育てに影響していると思うか、など)

可能な限り語ってもらった。

(5) データの作成

ICレコーダーに録音した内容を逐語で記録し、6名の協力者の被養育経験として語られた内容を、協力者ごとに各項目での語りを一覧表に整理した。

(6) 分析の視点

一覧表の中から被養育経験のなかで、プラスイメージとして残っているもの、マイナスイメージとして残っている記憶が、自身の子育てに関する考え方やライフコース選択に関連があるのか、また、それは保育施設選択時にどのように影響しているのか、インタビュー協力者6名それぞれについて表に整理した。そして、その表をもとに、語りの内容を被養育経験と現在協力者が抱く子育て観と施設選択との関連についての視点から分析した。

3. 研究内容と考察

(1) 協力者の背景

インタビュー協力者6名をそれぞれAさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん、Fさんと表記する。

①Aさんの背景

Aさんは、夫と子ども(5歳)の3人家族である。子どもは2歳児クラスから地方裁量型認定こども園に入園した。このときは専業主婦であったが、子どもが年長児クラスになり、Aさんは歯科医の資格を活かして、週2日仕事復帰している。

②Bさんの背景

Bさんは、夫と子ども(5歳と3歳)の4人家族である。Bさんは、自宅でピアノ教師をしている。子どもは、上の子どもが2歳児から、下の子どもは1歳児から公立保育園に入所した。

③Cさんの背景

Cさんは、夫と子ども(2歳と0歳)の4人家族である。Cさんは教員で、現在育児休業中である。

④Dさんの背景

Dさんは、夫と子ども(1歳)の3人家族である。Dさんは正社員として働いており、子どもは0歳児クラスから幼保連携型認定こども園に入園した。

⑤Eさんの背景

Eさんは、夫と子ども(2歳)の3人家族である。子どもは、3年保育で認定こども園の入園を希望し

ている。Eさんは専業主婦で、現在第2子を妊娠中である。

⑥Fさんの背景

Fさんは、夫と子ども(3歳と1歳)の4人家族である。上の子どもは3年保育で幼稚園に入園した。早朝の時間帯だけ義母に下の子どもを預け、夫が経営するお店の手伝いに入っている。

(2) いつから保育施設に入所させたいか、いつまで家庭で子どもと一緒にすごしたいか

いつから保育施設に入所させたいか、いつまで家庭で子どもと一緒にすごしたいか、という問いかけに対し、「かわいい時期を一緒にすごしたい。」と願う母親の強い気持ちが語られた。また、Eさんは、実母から『子どもは最低でも3歳になるまでは自分でみなさい。』と言われていたので、3歳までは自分で見るつもりでいる。」と語った。そして、「幼児期に母親が仕事で忙しく、母親ともっと一緒にすごしたかった。」と語ったFさんは、「専業主婦に憧れ、子どもが生まれてからずっと一緒にすごしたいと思っていた。」と話した。保育所入所を考える場合は3歳未満で入所し、幼稚園を選択する家庭においては、3歳まで家庭ですごした後、3年保育で入園するケースが見られる。石黒(2011)の報告にあるように、幼稚園の選択は専業主婦で、母親が自身の手で育てたいと考えることが影響しているといえる。Bさんは、当初子どもを幼稚園に入園させたいと考えていたが、自身が体調を崩したことで子どもを保育所に入所させることになった。「自分が育ったように、同じ幼稚園の教育を受けさせたいと考えて、それまでは自分で見るつもりだった。」と語り、過去に自分がそうだったように、我が子にも同じように経験させたい、と願う自身の育ちが施設選択に影響する事例が見られた。

(3) 被養育経験と子育て観との関連

保護者は、幼児期に経験した出来事や、その時に感じた感情を、子どもを育てる過程で思い出し、その時どう思ったのか、どうしたかったのか、どうされたかったのか、その時に心を留め、場面をよみがえらせる。そして、子どもの時の自分の感情だけでなく、その時の保護者の気持ちまでも読み取るようになる。保護者は、無意識に自分の思い出の良い部分と辛い部分が、いまどのように生かされているかを感じ、調整しながら自身の子育てに生かそうとすることが協力者のインタビューから語られた。

①A さんの事例

A さんは、幼児期の印象深いエピソードとして、厳しかったスイミングスクールの話をした。ほんとうにやめたい、やめたいといつも思っていたこと、あまり上達しなかったこと。行きたくないと言って、お母さんに「行きなさい。」と怒られながら、10 歳くらいまで通っていたと話した。しかし、振り返ってみるとバタフライ以外は泳げるようになっており、いまとなつては良い経験だったと思えるようになってきている。そんな経験から、息子にも習わせたいと考えるようになった。昔、親に強いられた嫌だと感じていた記憶がプラスに塗り替えられている。息子はスイミングを気に入っているが、仮に嫌がっても、自身の経験から後になって良かった、と思えることがわかっているから習わせたい、という母親の経験に基づく子育て観がみえる。

また、施設選択時にポイントとなった英語については、母親と中学生の時の先生に、「これからは何をするにも英語よ。」と言われたことが頭に残っていると話した。小学生の頃から習っている人もいたが自分にはそのチャンスがなかった、という A さんは、「通える距離のところに、英語教育に力を入れているところがあったので、ネイティブに近い発音ができたらいいな、と思い施設に期待しています。」と語った。また結婚後、海外生活を体験したことで、子どもに英語を身に付けさせたい気持ちが更に強くなったと言い、A さんの被養育経験と現在の家族の生活経験が、子育てに反映されていることがわかる。

②B さんの事例

B さんは幼児期、年少クラスから 3 年間幼稚園で過ごした。出身園は音楽教育が盛んな幼稚園で、発表会に向けていつも先生がピリピリしていた記憶が脳裏に焼き付いている。しかし、器楽のステージで一人だけ選ばれる大役を、B さんは完璧に弾けたことがとても嬉しい思い出として残っていると語った。厳しい練習の日々で、楽しく遊んだ記憶もない、という B さんだが、我が子も出身園に入りたいと考えていた。その理由に、「親にも先生にも言えなかった、発表会でバレエが踊りたい、という思いがずっとあったからだ。」と話した。親が、バレエは衣装造りが大変だからと、B さんは親の指示で器楽グループになった。「みんなキラキラしたチュチュで可愛くて、でも私はバレエがやりたい、って言えなかった。」子どもにその幼稚園

に行かせたいと考えたのは、バレエのステージの踊りや、器楽のステージの指揮者になることに憧れがあったからだと話した。そして、それを演じる我が子を見ることで自分が満足し、評価されるという親の見栄だったと振り返った。自身の体調不良から、子どもを保育所に入所させることになった B さんは、保育所の運動会を通して、大人ができるようにさせるという視点から、子どもが自ら喜んで育っていくことの喜びを感じるようになった。「発表会だけの練習じゃなくて、そのための練習ってないんですよ。普段の保育のなかで練習している気に入っている歌をお披露目するってなると、特別なことを強いられているわけじゃなくて、それはすごく子どもたちの心が豊かですよ。そうゆうの見たときに、良かったな、って思いますよね。」と語り、保育施設で何かをできるようにしてほしい、ということではなく、この時期に、先生や子どもたちとのふれあいを通して、笑顔で過ごせるように、そして子どもなりに相手の気持ちを理解できるようになることの方が大切だ、というように子育て観が変えられてきたと語った。B さんの事例では、子どもの保育施設を選択する時、自身が経験したように子どもにも歩ませようとする気持ちがはたらいていたことが語られた。しかし、B さんは子育ての過程で、被養育経験を自分はどう思っていたのか、そしていまどう思うのか、自身の子育てをどうしたのか、ということを感じるようになる。そして、子どもを取り巻く環境や保育者、子どもの成長の姿に影響され、子育て観が変えられていく様子が語られた。

③C さんの事例

C さんは、自身が卒園した幼稚園のような施設に我が子も通わせたい、という気持ちがあることをこのインタビューで自覚した、と話した。「お勉強、お勉強っていうんじゃないで、自由時間に走り回ったり、裸でボディーパーティンクしちゃうような。あと、運動会やクリスマスのページェントも楽しかった。歌ったり、そうゆうことがすごく思い出に残っていて、そのなかでもページェントの練習して、歌が好きだったんだなあ、あと泥んこ遊びも、泥団子作ったり。」と話した。そして、「幼児期には子ども同士で自然のなかを走ったり、ケンカしたり、遊んだり、子ども同士のコミュニティーのなかでいろんな経験をしてほしい。」と語った。施設を選ぶ時のポイントとして、C さんは広々とした園庭で、子どもがおもいきり走

り回れる環境や、子どもがのびのび活動できる場をあげている。「結果、自分が行ったようなところがいいな、って思ったけど、それはたまたまそこが一致しただけで、自分が育った環境に置きたいわけじゃない。」と話し、「私が育ったように子どもを育てたいとはあんまり思わないなあ。やっぱり自分が行けなかった分キャンプにたくさん連れて行ってあげたいと思うし、むしろ、自分がやりたかったことをさせることが多いかもしれない。良かったこともしたいけど。」と話した。インドア派だったという父親にせがんで連れて行ってもらったキャンプは、とても楽しい思い出として心に残っており、母親になって、いまは子どもを連れ、プレイパークのキャンプに参加していると語った。子育てのモットーは経験と人だと語り、いろいろな経験をとおして、いろいろな人に関わってもらうために環境を整えるのが親の役目だと語った。意識していたわけではない、としながらも自身の楽しかった思い出を我が子にも経験させたい、と願う思いが働いていることがわかる。そして更に、自身が子どもの頃にして欲しかったことも、現在の子育て観に加えられるようになる。

④Dさんの事例

Dさんは、自然と調和のとれた施設を子育て環境として選んだ。そして、自身の幼児期の経験が子育てにとっても影響していると語った。意識はしていなかった、というDさんだが、保育施設を選ぶにも、自然豊かな環境や、職員の対応の様子に気持ちが向いたのは、のどかな雰囲気のなかでたくさんの人に囲まれて、人と関わって生きてきたからだと話した。Dさんは、自宅の同じ敷地内に祖父母といとこの家があり、毎日、いところや近所の子どもたちと庭で鬼ごっこをしたりして遊ぶのがとても楽しみだったと話した。また、「子どもがやりたいことに協力を惜しまない家庭だった。」と振り返るDさんは、たくさん習い事をしてきた。「ピアノは大好きだったが、辞めたいと思ったこともある。そんな時母は、『練習しなさい。』と怒るのではなく、『ここまで頑張ったんだからやればあ〜。別にいいじゃない。お母さんはそんなに上手く弾けない。』と言い、その母の支えで続けられた。」と語った。そして、そのピアノの練習が、何かを得るためには練習しないといけないという気持ちを生み、勉強にもつながる習慣づけになったと語った。

Dさんは被養育経験を振り返り、親が「こうしろ、

あーしろ。」ではなく、いつも近くで見守り、なんでも話を聞いてくれるありがたい存在だったと話した。Dさんは有名音楽大学を卒業したが、家族のなかで大学卒の教育歴をもつのはDさんだけである。DさんもDさんの家族も教育歴にはこだわらない。Dさんは、「有名な学校を卒業するとかではなく、生きる力のある素敵な考えをもった人の方が楽しい。」と語り、我が子には、自分の好きなことを見つけて、いろいろ経験するなかで人と関わり、相手の思いがわかるようになってほしいと語った。そして、Dさん自身が、これまで特に苦勞なく流れのなかで知識を身に付け、生活できていることをあげ、小学校に入るときに他の子より自分の子どもが抜きんで勉強ができるようになってほしいとは思わない、と語った。それよりも、子どもには自然と触れ合う経験をたくさんさせ、何もないなかで工夫し、想像して、考えて結びつけていくような生きる力を育みたい、と語った。自然豊かな環境のなかで、大勢の親戚に囲まれ、地域の人たちと共に助け合い楽しみながら生活してきたDさんの被養育経験は、さまざまな人との関わりのなかで成長する過程で、生き方の姿勢が培われてきたことを感じる。Dさんが語った生きる力は、どれだけ自分が楽しいと思えるか、素敵と感じるか、満足できるか、その評価は他人から見えてどう映るか、ということではなく、自分自身、子ども自身がどう感じるかであり、一人ひとりの思いを尊重する姿が感じられる。教育歴にとらわれることなく、真にその人の魅力を感じ、価値を感じ、そのなかで生きていくことの方が、豊かな人生だと思っている。それゆえに、幼児期を過ごす保育施設では、五感を養い、さまざまな経験をし、豊かな自然のなかで、自分がほんとうに好きと思えるもの出会ってほしいと願っている。

(4) 被養育経験とライフコースとの関連

先行研究(堤(2014)、丹治(2015)、石黒(2011))から、母親の就労状況や就労希望、ライフコースが施設選択に関連があることが明らかにされている。母親が仕事に就くということと、被養育経験との間に、どのような関連があるのか、また、それが現在の子育て観や子どもの保育施設選択にどのような影響が見られるのか。インタビュー協力者から、それぞれの家族が抱えるさまざまな生活条件のなかで、現在をより良く生活するために折り合いをつけながら、方向を見出そうとする様子が語られた。Fさんのように、子どもの頃もっと母

親と一緒にいたかった、という思いを埋めるように、専業主婦に憧れ、その後のライフコースや子どもの施設選択に影響を及ぼす事例も見られた。しかし、子育て支援をとおして、また第2子を出産し、子どもが増えることで、被養育経験の感情が変えられ、その後のライフコースや保育施設選択に影響を及ぼす事例も見られた。

①Aさんの事例

Aさんは働く母親を見て育った。Aさんも、子どもが年長児クラスになると週2日、子どもが保育施設にいつている時間帯に仕事を始めるようになった。「子育てしながら少し働いて、子育てや家庭のことに重点を置くという生活スタイルは、以前からイメージしていたものに近い。」と話した。チャンスがあれば、子どもが小学校に上がる頃に仕事を始めたいと話していたAさんだったが、子どもが認定こども園に入園したことで、予定より早く仕事を始めることが可能になった。「子どもが小さいうちはそばにいて、一緒に育てたい。」と語っていたAさんの子育て観が変化したわけではない。たまたま入園した保育施設がAさんの思い描く仕事と子育ての配分を可能にした。これから子どもの成長に合わせ、仕事量を増やしていきたいと語り、親、妻以外の世界を持ち続けたいと話した。そして専業主婦のときには社会的に離れてしまっているようなプレッシャーがあったが、働きはじめたことで、「子どもは子どもの世界。私はわたしで頑張る、みたいな。関係が平行になってきたように感じる。」と話した。

②Cさんの事例

専業主婦の母親に育てられたCさんは、理想は専業主婦で、子どもができれば仕事を辞めるつもりだったと話した。Cさんは、「仕事が大好きで、仕事に100パーセント注ぐためには、子育てとの両立は不可能だと考えていた。子どもができた時、仕事を十分やり切ったという気持ちになれなかったので、もうちょっとこの仕事を続けたいな、って思うようになって、子どもが生まれてからは上手く両立できるように頑張ろう、という気持ちに変わりました。」と語った。被養育経験から、自分も専業主婦の生活を思い描き、子どもを幼稚園に入れるものと思っていたCさんだったが、仕事のおもしろさや達成感が、仕事を辞めることを思いとどまらせ、仕事と子育ての両立が叶う施設選択を目指すようになる。当初入園を望んでいた幼稚園のイメージにある広い園庭、走り

回れる環境で子どもをすごさせたい、とい子育て観に変化はない。Cさんは、ライフコースと子育て観が満たされる選択として、第1子は、1年だけ広い園庭がある幼稚園に通わせることを選んだ。そして願わくは、第2子入所時に、きょうだい一緒に、Cさんが望む環境の整った保育所に入所させたいと考えている。いまCさんは、自分の力の100パーセントを仕事や子育てのどちらかに注ぐのではなく、自分の考えが納得できる程よいバランスを探りながら施設選択を考え、これからの家族の生活スタイルを模索している。

③Dさんの事例

Dさんが勤務する会社は、子どもが1歳になる前の日から仕事復帰するのが会社のルールになっている。しかしDさんは、予定の2ヶ月前には慣らし保育を始め、1ヶ月前には仕事復帰していた。Dさんの母親は、Dさんが小学校に上がる頃に働きに出るようになるが、それまではいつも家にいた。Dさんの父親は単身赴任の時期があり、留守を任された母親は、働きながらその時々で必要な判断力や決断力をもって子どもたちを育ててきた。Dさんは「以前から、結婚し、子どもをもっても仕事は絶対に辞めないと思っていた。」と話し、子どもを保育施設に入れて働くことを当然のことと考え、0歳児クラスから入所させた。Dさんは、「子どものやりたいこと、自分のやりたいことを人に左右され、合わせるのではなく、その時々で自分で判断し、行動したい。」と話した。そして、そのためには自分にも経済力が必要だと言い、夫も自分もそれぞれが働き、経済力をもつことでお互いの判断を尊重し合える関係でいられると語った。もっと子どもと一緒にいられるのに、早く育児休暇を切り上げたことについて、「もう休みは十分だったんです。そのころは昼間おっぱいも飲まなくなっていたので、私いなくても平気だな、って。収入は関係ないんですよ、ありがたいことに手当が出るので。時間を短く復帰したので、あまり変わらない。」それよりも、仕事をしている以上は必要とされる人でいたいと考え、仕事がスムーズに運ぶタイミングを考えて復帰したかった、と語った。Dさんは、子どもを保育園に入れながら働くことについて、自分にとって丁度いいバランスだと感じており、時間的な余裕がなく、コミュニケーションが少なくなることについても、子どもがかわいそうだ、という発想にはならない。早く保育園に入れても子どもは育つ、と考え、そこに少しの

不安もない。母親がそばにいることだけが子どもを育てるのではなく、保育園に入れ、多くの人に関わる中で育てられることの方が、むしろ良いと考える D さんの選択には、大勢の親戚や地域の人に囲まれて育った被養育経験の影響もあると考えられる。

④E さんの事例

E さんは、実母に「子どもが 3 歳になるまでは自分で見なさい。」と言われており、自分でも母親がしてくれたように、子どもが 3 歳になるまでは自分が家で見ると決めていた。家で子どもとすごすか、実家か近くの児童センターに行くくらいで、他の親子との交流はなかった。しかし、引っ越しを機に子育て支援に参加するようになり、第 2 子を妊娠すると、下の子どもが 1, 2 歳になったら働きに出たい、という気持ちに変わっていった。家のなかで母親と二人きりですごすことの多かった E さんの子どもは、子育て支援センターに行っても他の子どもたちと一緒に行動することができなかった。E さんは「どうしてうちの子だけ、また一人で輪から外れたことをして、恥ずかしい、と思い、とても悩んでいた。」と話した。しかし担当の先生の言葉掛けで、「そうか、うちの子は『みんな何しているんだろう？みんなと同じことして。』って思っているのかもしれない、私は子どもに対して狭い視野しかもっていなかった。子どもにこうゆう子になってほしい、っていうなら、そうゆう環境を親がつくってあげなきゃ、子どもにいい子になってほしい、っていうんじゃない、まず、自分が変わらなきゃ、って思った。」と話した。自分の母親のように優しく楽しく子育てしたいと思っていた E さんだが、はじめての子育ての理想と現実に戸惑い悩んでいた。E さんは、子育て支援の場を通して、他の親子や担当の先生と触れ合う中で、自分自身の気持ちと向き合い、これまで気付かなかった見方や考え方に励まされながら、自身の子育て観が徐々に変化していく。複数の子育て支援に参加するなかで、自分が子どもに何を望んでいるのか、どうしてほしかったのか、自身の子育て観に向き合い、これまでとは違う視点をもつようになる。親の思いばかりでなく、子どもの成長をどう考えるのか、子どもはどう思うのか、その時の子どもの心のなかを感じ、ふさわしい環境をつくりだす、という考え方に導かれ、入所させたい施設を選択するようになる。そして、第 1 子の施設選択時には、今後仕事に就くことも念頭

に、第 2 子が 3 歳未満児でも入所可能で、施設を変える必要のない認定こども園を選択したいと考えている。保育施設を選択が、母親のライフコースに影響を与えることになる。⑤F さんの事例

F さんの母親は、F さんが小学生になる頃、外に働きに出るようになった。F さんは「とても寂しかった。」という思いをずっと持ち続けている。「お母さんが家にいる家庭がうらやましくて、憧れだった。」と語り、子どもと一緒にいられる専業主婦になりたいと思ってきた。子どもを近くの幼稚園に入れ、短時間ではあるが、自営業の夫を手伝っている。その間、義母に子どもを見てもらい、第 2 子も幼稚園に入れるつもりでいる。保育園に子どもを預けて働く、という選択肢はない。「ずっと預けちゃうのはかわいそうだから。」と話し、子どもと一緒にすごせることに幸せを感じている。しかし、子どもが 2 人になり、子育ての大変さも感じるようになってきた。「少し外に出るのもいい、っていうんですか、煮詰まっちゃうから。」と言い、専業主婦ではなく、仕事に携わってほしい、という気持ちが出てきた。「仕事はいまくらいのペースか、この先子どもの手が離れば、少し増やしていこうと思う。」と話した。F さんの事例に見られるように、被養育経験が、その後のライフコースや子どもの施設選択に影響を及ぼすこともある。

4. まとめと今後の課題

本研究の協力者の語りからも、日比野 (2013) の報告にあるように、子育て期における子どもの存在やその成長する姿とおして、保護者の意識が高められ、子育て観に影響を与える様子が見られた。そして、被養育経験と子育て観、ライフコース選択との関連については、保護者は、被養育経験の影響を残しながらも、それぞれの家族が抱える問題や生活条件のなかで、現在の生活や子どもの実情に合わせ、子ども観や自身のライフコースが変えられていく様子が協力者のインタビューから語られた。それは、保育施設入所前の子育て支援の場を通して、また、保育施設入所後の保育士の対応や他の親子の様子に触れる中で、保護者も子どもと共に成長し、子育て観や子どもへの願いが変えられていく事例が見られた。そして、認定こども園が選択肢に加えられたことで、専業主婦から自分が考えていたよりも早い時期に仕事を始めることが可能になり、保護者のライフコースに影響を与える事例がみられた。ベネッセ総合研

研究所 (2015) が保護者を対象に実施したアンケートや、先行研究 (七木田ほか (2006), 住田ほか (2012, 2013), 丹治 (2015)) から保育所選択者は利便性, 幼稚園選択者は保育内容や保育環境を重視することが示されている。また, 認定こども園の認知度は, 保育の質にこだわる教育熱心な人, (劉楠 (2015)) そして認定こども園を利用したいと考える人は, 保育や学習メニューの充実度を重視する (冬木春子 (2015)) 傾向があることが明らかにされている。しかし, 一人ひとりの視点に立って見ると, 施設選択の要因としてこれらを一律に考えることはできない。保護者には, 子どもの育ちに対する思いや願い, 子育て観があり, 保育施設選択に対するこだわりがある。それぞれの家庭状況のなかで, 保護者は, そのときに最も必要と考える, どうしても外せない事情を優先し, 施設選択を行う。母親の体調不良や経済的な要因, 決められた仕事復帰時期, 時間的な理由などで, そこしか選びようがない, ということも起こる。

阿部 (2003) は, 性別役割分業が一般的であった経済成長の時代から, 社会が変化した現在においては, 「子どもは母親の手で」とか「小さいうちは家庭で母親が」という子育て観で育てようとすると, 多くの不都合が生じ, 生き難さを感じると指摘している。そして, 「子どもの生活という視点から子どもに向かい合い, 実際の生活を積み重ねることを通して, 子どもにとっての子どもの生活, 子どもとの生活を引き受けた大人の生活が姿を現してくると思います。変化する時代のなかで, 子どもも大人も, それぞれの人生の主人公になるための子ども観や子育て観が確立されていくと考えるからです。」⁷⁾と語り, 子どもと暮らす大人にも「こうなりたいとか, ああしたい」という自分自身の生きることへの願いがあり, 子どもに対しても「こんな子どもに育てほしい」という子どもへの願いがあり, そして子ども自身にも子どもの願いがあることから, お互いを尊重し「子どもも大人も『私の物語 (こうしたい, ああしたい)』を, その関係のなかで絶えず修正して生きていくことになります。」⁸⁾と話し, 折り合いをつけながらそれぞれの物語をつくりあげていくことの重要性を語っている。

本研究においても, インタビュー協力者の語りから, 阿部 (2003) が指摘するように, 保護者自身の物語をその時々状況にあわせ修正しながら生きる保護者の姿が見られた。自身にとって丁度よ

い子育てと仕事とのバランスを探りながら働きはじめる A さん. 仕事がスムーズに運ぶ仕事復帰時期を第一に考えた D さん. 2人の子どもの同時入所に, 子どもの生活に視点を当てた考え方から選択することの難しさに悩みながら, なんとか納得できる方向を探ろうとする C さん. すなわち, 保護者は, 子育ての過程でさまざまな経験を通して, 新たな視点や気づき, 自身のライフコースに対する考え方を変えられていく。保育施設での子どもの成長の姿を通して, また子育て支援会場で目にする他の親子の様子をとおして, そして, 担当保育士に子どもや保護者の気持ちをしっかり受け止めてもらう経験をとおして, 保護者の考え方や物事の捉え方にこれまでと違う思いが現れる。

大場 (2012) は, 人にはそれぞれ“発想の軌跡”というものがあると語っている。自分がどういうことを経験し, どんな思いでどういふふうになんか状況を捉えるようになったか, 自分では説明できないような“暗黙知”があると「一人の人間として日常生活の中で培ってきたある種の見解, 人を見る見方, あるいは発達を捉える目, あるいは学校ということを理解するまなざし, そういふものが以外に大きい」⁹⁾と語り, 「人というのは人間理解するときに自分の経験から割り出された人間の見方がある。」¹⁰⁾とも語っている。保護者は被養育経験の影響を残しながらも, 現在の生活の中で, 親子が日々経験する一つひとつの出来事を通して, 物事の考え方や, 物の見方, 感じ方が親も子も培われていることになる。

保護者は, それまで無自覚に行われていた子育てについての考えを, 子どもの保育施設選択を機に自覚化させる。そして, 漠然としていた子どもへの思いや願いを自覚化させるとともに, 保護者自身のライフコースも自覚化させる。子育てはその最初において, 被養育経験を基底にしながらも, それぞれの家族が経験する出来事をとおして, そして家族が置かれた生活条件の中で, 現在の生活や子どもの実情に合わせていくようになることが理解できた。家で子どもと二人だけですごすことの多かった E さんは, 子育て支援の参加で, 子どもの思いを理解する新たな視点や, 施設による対応の違いを知り, 自分が求める施設を選択する視点が養われたと話した。子育て支援につながり, 保育施設の生活を知り, 保護者の子育て観にあった施設選択がなされることで, 親子にとって喜びの多い経験が積まれることになる。保護者が自身

のライフコースや子育てについて、現状を踏まえて意識的に考え始める機会となる施設情報や、子育て支援情報が広く子育て中の保護者にいきわたることは、よりよい施設選択の機会を得ることになる。

また、インタビューで「子どもが3歳になるまで、一番かわいい時期を家で一緒にすごしたい。」と語っていた保護者が、第2子の妊娠がわかると「次は、子どもが1,2歳になったら保育施設に入れて働きに出たい。」という気持ちに変わっていく様子が見られた。子どもを0歳児クラスから入れたDさんは「昼間おっぱいも飲まなくなっていたので、私いなくても平気だな」と語ったが、保護者の精神的、肉体的負担や、経済的な問題とは別に、保護者は子どもどのような姿をとおして、保育施設に入れてもいいと思うようになるのか、このことに関する更なる検討については、今後の課題としたい。

引用文献

- 1) 広田照幸, 1999, 「日本人のしつけは衰退したか」, 講談社現代新書. p. 191.
- 2) 広田照幸, 1999, 「日本人のしつけは衰退したか」, 講談社現代新書. p. 187.
- 3) 広田照幸, 1999, 「日本人のしつけは衰退したか」, 講談社現代新書. p. 128.
- 4) 日比野直子, 2013, 「母親のライフコースにおける子育て—母親の語りによる子育て過程と支援—」, 『金城学院大学論集 人文科学編』, 第9巻第2号, (2013. 3), pp. 116
- 5) 日比野直子, 2013, 「母親のライフコースにおける子育て—母親の語りによる子育て過程と支援—」, 『金城学院大学論集 人文科学編』, 第9巻第2号, (2013. 3), pp. 118
- 6) 田邊恭子・米澤好史, 2009, 「母親の子育て観からみ母子の愛着形成と世代間伝達」, 『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』, No. 19, (2009), p. 27.
- 7) 阿部和子, 2003, 「保育者のための家族援助論」, 萌文書林. p. 102.
- 8) 阿部和子, 2003, 「保育者のための家族援助論」, 萌文書林. p. 103.
- 9) 大場幸夫, 2012, 「保育臨床論特講」, 萌文書林. p. 37.
- 10) 大場幸夫, 2012, 「保育臨床論特講」, 萌文書林. p. 92.

参考文献

- 木山徹哉・片山順子・森博文・小方圭子, 2003, 「北九州市における保護者の保育ニーズに関する調査：保育機関の選択基準, 期待する保育内容及び保育者像」, 『日本保育学会大会発表論文集』
- 七木田敦・松井剛太・上村眞生・岡花祈一郎 2006, 「幼稚園・保育所を利用する保護者の幼保一体化施設に対する意識に関する研究」 『保育学研究』, 第44巻第2号, pp. 163-174. (2006)
- 石黒万里子, 2011, 「都市部における父母の保育選択-中産階級の分化に着目して」 『早稲田大学学位請求論文』, pp. 1-15.
- 住田正樹・山瀬範子・片桐真弓, 2012, 「保護者の保育ニーズに関する研究—選択される幼児教育・保育—」, 『放送大学研究年報』, 第30号, pp. 25-30. (2012)
- 住田正樹・山瀬範子・片桐真弓, 2012, 「幼児の生活実態と保育に対する保護者の意識」, 日本保育学会 第66回大会 (会場:中村学園大学・中村学園大学短期大学部) 2013年5月11-12日開催
- 住田正樹・山瀬範子・片桐真弓, 2013, 「幼児期の子どもの育ち—一家庭, 地域, 幼保, 幼児教育産業—」, 放送大学研究年報, 30, 25-30. (2012)
- 堤 孝晃, 2014, 「どのような家族が保育所/幼稚園を利用するのか」 『実践女子大学人間社会学部部紀要』, 第10集, pp. 153-173. (2014-03-31)
- 小林佳美, 2015, 「保育選択における格差の所在—親の世帯年収, 就労形態に着目して—」, 文部科学省 共同利用・共同研究拠点事業 社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点 2015年度 参加者公募型二次分析研究会子育て支援と家族の選択, pp. 97-109. (2016. 3)
- 丹治恭子, 2015, 「『望ましい保育施設像』と保育制度選択—保護者の利便性と子どもの保育環境の視点から—」, 文部科学省 共同利用・共同研究拠点事業 社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点 2015年度 参加者公募型二次分析研究会子育て支援と家族の選択, pp. 181-197. (2016. 3)

- ベネッセ総合研究所, 2015, 「第 5 回幼児の生活アンケート」.
- 劉楠, 2015, 「認定こども園の認知度の規定要因—行政と市民のコミュニケーションの課題—」, 文部科学省 共同利用・共同研究拠点事業 社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点 2015 年度 参加者公募型二次分析研究会 子育て支援と家族の選択, pp. 141-150. (2016. 3)
- 冬木春子, 2015, 「共働き世帯における保育所利用選択」, 文部科学省 共同利用・共同研究拠点事業 社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点 2015 年度 参加者公募型二次分析研究会 子育て支援と家族の選択, pp. 39-49. (2016. 3)
- 厚生労働省, 待機児童に向けて緊急的に対応する施策について, 2016. 3. 28
- 経済財政諮問会議, 子育て安心プラン, 2017. 6. 2
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課, 「保活」の実態に関する調査の結果, 2016. 7. 28
- 渋谷区, コミュニケーションアプリ「LINE」による情報配信を始めます, 2017. 2. 15
- 朝日新聞, 「保活」代行サービス, 2016. 12. 9
- 金原あかね, 2007, 「就学前保育施設の利用傾向と満足感に関する調査研究」, 『家政学研究』, Vol. 54. No. 1, (2007. 10), pp. 7-15.
- 佐々木尚之, 2010, 「日本人の子育て観」, 『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集』, [10]JGSS Research Serise No. 7, pp. 35-47.
- 大宮勇雄, 2010, 「学びの物語の保育実践」, ひとなる書房.
- 本田由紀, 2008, 「『家庭教育』の隘路」勁草書房.
- 井上清美, 2015, 「子育て支援ニーズの分節化—専業主婦は何を求めているのか」, 文部科学省 共同利用・共同研究拠点事業 社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点 2015 年度 参加者公募型二次分析研究会 子育て支援と家族の選択, pp. 77-87. (2016. 3)
- 品治佑吉, 2015, 「母親の就労形態選択に保育サービス利用の充実が及ぼす影響—フルタイム就労意向をもつ層に着目して—」, 文部科学省 共同利用・共同研究拠点事業 社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点 2015 年度 参加者公募型二次分析研究会 子育て支援と家族の選択, pp. 67-76. (2016. 3)
- 常田美穂, 2015, 「居住地域と保育サービスの選択傾向」, 文部科学省 共同利用・共同研究拠点事業 社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点 2015 年度 参加者公募型二次分析研究会 子育て支援と家族の選択, pp. 253-268. (2016. 3)
- 赤林英夫・敷島千鶴・山下紘, 2013, 「就学全教育保育形態と学力・非認知力: J C P S 2010-2012 に基づく分析: JCPS2010-2012 に基づく分析」, Joint Research Center for Panel Studies Discussion Paper Series Keio University, pp. 1-15.
- 厚生省, 1998, 「厚生白書 (平成 10 年版)」, 厚生労働省ホームページ, http://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/1998/
- 厚生労働省, 「『保活』・『保育制度全般』についてのご意見」の募集結果, (2016. 5. 20 公表)
- 大場幸夫, 2007, 「こどもの傍らに在ることの意味」, 萌文書林.
- 大日向雅美, 2001, 「3 歳児神話を検証する 2~育児の現場から〜」, 日本赤ちゃん学会第 1 回学術集会.
- 上地雄一郎, 2015, 「メンタライジング・アプローチ入門」, 北大路書房.
- ヴィゴツキー, 2003, 「『発達最近接領域』の理論」, 三学出版.
- 神原文子, 2004, 「家族のライフスタイルを問う」, 勁草書房.
- 本田由紀, 2004, 「女性の就業と親子関係」, 勁草書房.
- S・D・ハロウェイ, 2014, 「少子化時代の『良妻賢母』」, 新曜社.